

エッセイ 中東奮闘記－湾岸50年、オイルマンの軌跡

第九回 よりよきアラブ理解のために

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

9-1. イギリスの大学へ突撃 - 学究生活を垣間見る

私は1995年1月7日にオマーン勤務を終え、妻と数日間の帰国休暇をインドで過ごして同月15日に帰国した。空港からまっすぐ横浜の家に帰ったが、電気や水がまだ通じていなくて暖房がつけられず、日本の冬の厳しい寒さに震え上がった記憶がある。

それから2日後の17日朝7時にテレビをつけたら、町一面に燃え広がる炎、空高く上る幾筋もの黒煙、大きく損壊したコンクリート造りの建物、横倒しになった高速道路の橋桁などの映像が目に飛び込んできた。異様な画面に「これ、何？」とわが目を疑ったが、その朝5時46分52秒に発生して6,435名もの犠牲者を出した阪神・淡路大震災後の惨状を映すものであった。あの垢ぬけた神戸の街のまさかの光景。私には、帰国早々思いもかけない映像であった。

私と妻にはしばらくぶりの日本、この年はできるだけ国内各地を旅行しようと決めて、手始めに3月に二人で北海道を訪ねた。函館で函館山やトラピスト修道院を訪ね、その坂道での散歩を楽しみ、朝市ではいかそうめんをほおばった。積丹半島を訪ねた後に、小樽で運河やガラス細工館を見学し、北海道ならではのおいしい寿司に舌鼓を打った。さらに知床半島に足を伸ばし、船から知床の風景や垣間見た野生の熊の姿に興奮し、登別では温泉や「クマ牧場」を楽しんだ。

旅の最後に訪れた札幌。3月20日の昼時に「すすきの」のラーメン店に入って頭上にあったテレビを見たら、サイレンを鳴らした救急車が走り回り、負傷者がホームや道路上に横たわり、人々が慌ただしく駆け回る騒然たる光景が目に飛び込んできた。「これ、何？」と注視すると、霞が関駅に入る地下鉄各線の車両内で神経ガスのサリンが撒かれ、乗客や乗務員、駅係員、さらには救助に当たった人々にも多くの犠牲者が出た地下鉄サリン事件の生々しい映像であった。平時の日本では、到底想像できない映像であった。「なんということをするのか」と事件を引き起こした宗教団体の教主に対する激しい怒りが私の中に込み上げたのを、いまもはっきりと覚えている。私が帰国した1995年は、恐ろしい天災や事件とともに始まった。

帰国した私には新しい仕事を探そうという気持ちはまったくなかった。やりたいことがあったからである。オマーンで書き溜めていた原稿を本にしたいという願いと、中東のことをもっと勉強したいという願いであった。

帰国直前の1994年の一年間、私はオマーンの新聞をもとにオマーンでの出来事を書き留め、それに自分の見聞や体験を書き加え、さらにオマーン社会に関するコラムをいくつとなく書き溜めていた。20万字以上の原稿であった。「これを本にできないものか」と考えていたのである。

4月に入って、中東の本を多数出版している小山に、「本を出したいのだが」と言ったら、「どんな本？日記風にオマーンでの出来事を書き留めた？偉い人の日記なら本になるが、エンちゃんの日記ではなあ。本になるかどうかは分からないが、知っている出版社があるから、紹介する。ただ、紹介するだけだよ」と言って、サイマル出版会ナンバー・ツーの女性専務を紹介してくれた。

彼女宛に原稿を送ってしばらく経ってから、彼女から「原稿を読ませていただきました。出版させていただきたいと思います。社長が遠藤さんにお会いしたいと言っています。会社にお出で下さい」という電話が入った。サイマル出版会は、当時日本で人気の出版社であった。それまで出版業界とはまったく縁のなかった私はやや緊張しながら、5月末に虎ノ門にあったサイマル出版会の本社を訪ねた。

出てきた専務にいきなり「遠藤さんは、新発田市出身ですよ。高橋宏さん知っていますか。塩原勇さんは」と聞かれた。「えっ！知っています。高校の同級生で、とくに仲のよい者たちです」と言って話してみると、彼女は同郷の女性であった。私よりは1年下。当時は女子高であった新発田西高から東京女子大に進み、卒業後に出版業界に入り、この要職を務めていたのだった。高校時代、高橋や塩原と一緒に英語塾に通っていた生田栄子さんだった。「彼女のことは聞いたことがある。たしか一緒に演劇をやったことがきっかけで、塩原と付き合っていた女性だ。この人だったのか」と私は思い出していた。

やがてその場に出てきた田村勝夫社長の言葉を私はいまもしっかりと覚えている。「遠藤さん、これでようやく遠藤さんも世の中に出ますね。おめでとうございます。今度この本を出版するにあたっては、生田がよくやってくれました。生田に礼を言ってやってください」とのことであった。ここまで漕ぎつけたのは、原稿の中身が合格だったとしても、小山の紹介もあり、また生田と同郷のよしみもあったのかもしれない。人間って、どこに縁があるのか分からないと、私は思った。

その場で、サイマル出版会で担当となる編集者の赤羽を紹介され、出版は10月、題名は「オマーンが見えてくる」に決まった。

もう一つの中東の勉強をどうしたものかと思っている時に、小山が「エンちゃん、よかつたらウチの中東経済研究所に来ないか？金は出せないが、客員研究員の辞令は出せる。好きな時に、研究所内の勉強会に顔を出してくればよいよ」と言ってくれた。辞令をもらっても何の支障もないので、私はこれを受けた。

ただ、私が中東の勉強をしようと願っていたのは日本でではなく、中東研究の本場イギリスの大学でのことであった。初めは、一年間で学位が取得できるイギリスの大学院への入学を考えた。これには生活費も入れて4百万円以上の金がかかる。大会社を途中で退職して退職金も満足にもっていない私には、そのような金は出せない。授業料がかからない方法はないものかと考えると、大学の教育スタッフとしておいて貰う以外に方法がなかった。しかし、私にはそれに足るアカデミックなバックグラウンドも能力もない。大学の研究所に、研究員として籍をおかせてもらう以外に途はなかった。

そんな中で、SOAS（ロンドン大学東洋アフリカ研究所）に在籍したことのある中東学者の浜渦に話したら、ごく気軽に「イギリスに行って、希望の大学の研究所を見て来たら。そこで希望を話してみたら」とアドバイスしてくれた。私から「私には学識もバックの組織もないので、オックスフォード、ケンブリッジとロンドン大学の御三家は無理だろう。それ

以外で中東の研究をしている所は？」と訊ねると、彼は、「ダーラム大とエクセター大ではどうか。それでよければ、私から連絡を入れられる」と言ってくれた。

日本からイギリスに到着して、まずはロンドン南部の「イギリスの庭」と言われるサリー州に住んでいた長女の葉子の家で落ち着いてから、私は浜渦の紹介を頼りに、イングランド北東部にあるダーラム大学に単身汽車で向かった。1995年7月中旬のことであった。ダーラム駅からどう行ったのか思い出せないが、とにもかくにも大学に着いた。大学に非常に緑が多かった記憶がある。構内を歩いて、ダーラム大学が小泉八雲の母校であること、また帝京大学がここにキャンパスをおいていることを、その時に初めて知った。

私は、そこで中東イスラム研究所所長のエーテシャミ博士に会って自分の経歴を話し、「研究員として置いてもらえないか」を訊ねた。所長からは、意外に簡単にOKがでた。「いいですよ。部屋もあげます。来られることを決めたら、連絡をください」とのことであった。

石油会社社員であったこと、テヘラン、バイルート、アブダビ、オマーンに駐在経験があること、オマーンの本がやがて出版されること、日本で中東経済研究所の客員研究員であること、浜渦の紹介があったこと、当時小山に代わって中東経済研究所所長に就任していた通産省（現経産省）エリート友人の佃が書いてくれた推薦状などが効いたのか、私には思ってもみない順調な滑り出しであった。

その後、私はロンドンに戻り、パディントン駅から列車でエクセター大学のあるイギリス南西部のエクセター・セント・デイビッド駅に向かった。同大学には、私の憧れの当時世界で唯一の「アラビア湾岸研究所」があった。「中東というよりアラビア湾岸諸国、とくにオマーンのことを学びたい」という私の希望に、ぴったりの場所であった。

セント・デイビッド駅の改札口を出て数10メートルを直進、突き当りの石塀に沿って道を数百メートル登り、左折すると大学の入口があった。入口と言っても、「University of Exeter」と書いた銅板を埋めた石柱があるだけであった。日本の大半の大学とは違って、構内を仕切る塀などはまったくない。直進した道の右側はすぐ深い谷になっていたが、左側は緑の芝が広がる丘。大きな樫の木があちらこちらに聳え立ち、その中に校舎が点在していた。夏の太陽の下、解放感溢れるイギリス南西部のエクセターの夏の光景であった。北東部のダーラム大よりも雰囲気が開放的で明るかった。気候も温暖で、冬に雪の降るダーラムと違って降雪は稀とのことであり、キャンパスも抜群に美しかった。

私は奥の方の坂の上に建つ「アラビア湾岸研究所」に直行し、研究所にいたブライアン所長に面談した。エクセター大がすっかり気に入った私は自分の経歴を話し、研究員として置いてもらえないかを訊ねた。所長の対応はダーラム大学とは違い、「うーん、考えられないことではない、検討してみる。少し時間をください」という慎重な答えであった。

イギリスから帰国してからは、サイマル出版の赤羽からの原稿の書き直しやコラム欄の追加要請、「目次」、「はしがき」や挿入する写真の提出等の打ち合わせに忙殺されたが、2ヶ月間はエクセターからなんの返事もなかった。「無理なのかなあ。歓迎すると言っているダーラムに行く以外ないか」と半分諦めかけていた9月になって、エクセター大から「研究員の申請書を出すように」という連絡が入った。

10月末になって、私の初めての著書「オマーンが見えてくる」が出版された。田村社長からは「おめでとうございます。これで遠藤さんも世の中に出ます。なお、この本は朝日新聞朝刊一面に広告を載せました」と電話連絡が入り、私は生涯で初めて新聞誌上に載った

「遠藤晴男」という名前を感慨深く眺めた。

私は200冊ほど本を買ひ、親戚や友人、それにオマーン大使館に100冊を寄贈したりして忙しい時を過ごし、ほっと一息を入れた11月中旬になってブライアン所長から「名誉研究員として受け入れることが決まった」という連絡が入った。

「はい、わかりました。いつ行ったらよいですか」と連絡をしたら、「これは教授会の決定で、これから大学の理事会に諮ります。最終的な結論は理事会次第です。いましばらく待ってください」との連絡。「そうか、大学には理事会というものがあるのか。知らなかった」と待つうちに、12月に入ってブライアン所長から、「理事会で、貴男の受け入れが承認されました。エクセター大学は、あなたを名誉研究員として受け入れます。どうぞお出てください」という連絡が入った。私は天にも昇る気分であった。

最近でこそ年配者の海外留学は珍しくなくなったが、当時はまだ珍しかったのであろう、日本経済新聞が「あの人はいま」というコラム欄で「丸善石油の初代中東事務所長を振り出しに長年アラブで暮らしてきた遠藤晴男さん(62)に、英エクセター大学の研究センターの研究員に迎え入れるとの連絡が届いた。心機一転さらにアラブの勉強をと意気込む遠藤さんは、新年早々に渡英する予定だ」と私のことを写真入りで記事にしてくれた。

イギリスには約100の大学があるが、一校を除いてすべて国立大学である。この中で、オックスフォード、ケンブリッジ、ロンドン大学が御三家であろうか。ダーラム大はその次にくる格の大学である。エクセター大学は開校こそ1855年と早い、カレッジになったのが1922年、大学になったのは1955年のことである。つまり、戦後出来た大学である。

中東研究では、エクセターはイギリスではダーラムに伍して5本の指に入る位置にいるが、大学としては伝統のあるダーラムの方が格上である。イギリス在住の長女には、「どうしてダーラム大に行かないの?ダーラム大は伝統もあり、総合大学としては、オックスフォード大、ケンブリッジ大に次ぐ名門校。エクセター大はイギリスの南部の名門校とはいえ歴史も浅い。それにエクセターは田舎よ」と言われたが、私にはエクセター大学の「アラビア湾岸研究所」というのがなによりの魅力であった。

松飾りがとれたばかりの1996年1月8日に、私は日本を飛び立ち、サリー州に住んでいた長女の家に一泊して、翌日昼過ぎに夫の稔と長女に車で送ってもらい、夕方に指定されたエクセター大のゲストハウス「リードホール」に到着した。車から降りたところで、「日本の方ですか」と日本人女性から声をかけられた。「そうですが、貴女は」と訊ねると、「この大学院に来ている者です」という。見知らぬところで、同じ国の人に会うとは心強い」と連絡先を聞いてから別れた。

リードホールは一階にはイベントホールと教授たちの食堂があり、入り口正面の古い石の階段を登ると、二階にゲスト用の部屋がいくつかあった。

指定された部屋に入ると、メモがおいてあった。「今日の5時から、研究所でシリア関係の講演会がある。講師は、シリア研究では第一人者のロンドン大学のマーシャル博士。参加大歓迎。Dr.Mehdi (メヘデイ博士)」とあった。

「この部屋でこのまま時間を過ごすのもつまらない。右も左もわからないが、せっかくなので取り敢えず出かけよう」と講演会が行われる部屋を覗くと、部屋はすでに大勢の人でごった返していた。やがてマーシャル博士の話が始まったが、博士の話は20分程度。

「これで終わり？」と思ったら、その後、質問が延々と続いた。出席者からの質問に博士が丁寧に答える。すかさず、別の出席者からのコメント、さらにまた別の出席者からの質問が出て、博士がまたそれに答える。そのような質疑応答が40分近くに及んだ。当時の日本のような講演者の話がメインという講演会とは異なり、私には初めての経験であった。言語は当たり前のことであるが、すべて英語であった。

講演会が終わると、司会者が「博士がロンドンに帰られるまでの間、大学近くのパブで懇談します。時間のある方はご参加ください」という案内。講演会が始まる前に探し当ててあいさつをすませていたメヘデイ博士らとともに、私はパブに直行した。そこでは、ビールを片手に出席者の間で話が弾んでいた。サラリーマン人生を送ってきた私には、それまでまったく縁のなかったアカデミックな人ばかり。新鮮な経験であった。かくして、私のエクセター大学での中東研究生活が始まった。

9-2. エクセター大学 - 名誉研究員として

大学を卒業してからアカデミックな世界とまったく関係のない世界で過ごしていた私にとって、エクセター大学での生活は人生最高の日々であった。

まずは、大学の環境が素晴らしかった。文学部、法学部、工学部、理学部、社会学部と多くの研究所を擁するストレッサム (Streatham) キャンパスは、威容を誇るエクセター大聖堂を擁するエクセター市一帯や遠くの海をも一望に見渡せる高台にあった。そこからの眺めで、身体の隅々まで開放感が一気に広がった。敷地面積は約30万坪。環境抜群、美しい大学であった。

キャンパスを東西に横切るメイン道路の「プリンス・オブ・ウェールズ通り」から丘の上までは緑の芝生が広がり、そのあちらこちらには大きな檜の巨木が生え、その葉が風に揺らぎ、樹々の下にはリスが走り回っていた。その上の方に赤レンガ作りの校舎や研究所、それにいくつかの学生寮が点在していた。校舎や寮の建物とやや離れた場所には、カモがゆったりと浮かぶ広い池、手入れの行き届いた花壇のある庭園や林が広がっていた。

エクセターはイギリス南西部に位置し、他の地域とは違って冬場も温暖であった。夏は太陽が燦々と照り付けるものの、日本のように酷暑になることはなかった。この地がイギリスでは仕事を引退した人たちが移り住む人気の地であることは、容易にうなづけた。

ここには自由な時間があった。日本では、午前9時から午後5時、アラビア半島では、朝7時から午後2時までのように。働いていたときとは異なり、時間に縛られることは一切なかった。好きな時間に何でもできる環境にあった。

「アラビア湾岸研究所」での私の身分は名誉研究員。同僚には、元オックスフォード大学教授で世界的に高名な中東学者、サッチャー首相の顧問を務める元国連大使、それに元イラク大使などがいた。研究所では、思いがけなく私にも二階の一室が割り当てられた。多少面映かったが、教授や博士の名札が掲げられた部屋に交じって、「Mr. HARUO ENDO」の名札を入口に掲げた。その後分かったのだが、「名誉研究員」は偉いのであった。個別に部屋を支給されない客員教授や客員研究員とは、格が違い待遇も違っていた。サラリーマン上がりで学究生活とは無縁だった者にとっては、破格の待遇であった。

部屋の右隣りは、イラクの農業問題が専門のイラク人のメヘデイ博士。左隣には、オック

スフォード大で博士号修得後、講師としてエクセター大学に赴任したばかりのアラビア湾岸研究が専門のイギリス人のラスメル博士。その隣が、アラビア語を教えるイギリス人の有名教授。その他にも、エジプトのノーベル文学賞作家ナギーブ・マフフーズ研究の世界的権威であるエジプト人教授。シリア研究の権威のレバノン人博士などなどの研究室が並んでいた。教授陣が多国籍なのには驚いた。

こんなアカデミックな場所で自由に時間を使えることは、最高の幸せであった。さらに、ここで教授たちや職員たちだけではなく、若い学生たちと自由に付き合えるのが、いままで経験のしたことのない楽しみであった。

学生も多国籍であった。私がいた1990年代後半にはエクセター大の学部学生数は1万人を少し超える程度であったが、学生は110ヶ国ぐらゐの国から来ていた(2022年には、学生数は2万5千人、約140ヶ国から学生が集まっているという)。大学内の道で会うと、「ハーイ！」と言って手を挙げてあいさつしてくれるアメリカ人の女子学生、よく一緒にコーヒーを飲んだアラビア語科や英語科のイギリス人男子学生、研究室にもよく来てくれた日本人留学生たち。キャンパスは多国籍の若者で溢れかえっていた。

とくに嬉しかったのは、アラブ諸国から、とくに湾岸、中でもオマーンからの留学生が大勢いることであった。エジプト、パレスチナ、ヨルダン、イエメン、サウジアラビア、クウェート、アラブ首長国連邦、オマーンなどとの留学生といつでも好きな時に付き合うことができた。中でも、オマーン人留学生とはとくに親しく付き合った。

大学にはメインの図書館の他に、研究所付属の中東に関する書籍や資料を備えた図書館があり、そこでは2人のイギリス人女性とイラン人女性が働いていた。私は朝10時と午後3時にはここに顔を出し、英語の勉強にもなるので、彼女たち3人とお茶をするようにしていた。心む時間であった。中には、自宅に招待してくれる独身イギリス人女性も出てきて、交流を楽しんだ。大学院卒のイラン人女性も優しかった。

まわりにはイギリス人女性秘書、アメリカ人女子学生、サウジアラビアの豪族出身の院生、イギリス人学生、日本人女子院生、オマーン人院生、その他湾岸からの学生たちがいて、私は1年足らずの間、エクセターでの生活を満喫した。

9-3. 石油は呪いか - 驚きの命題

私の部屋の左隣の少壮の中東学者のラスメル博士とはよく語り、よく一緒にパブに飲みに行った。いま思うと、「20代後半の博士が60歳を過ぎた私などとよく付き合ってくれたものだ」と思う。博士は、私の石油知識と中東体験に興味があったのだろうか。博士に会った時に、「学者はどのぐらゐの本を読むのか」と訊いたら、「自分の専門に関する本や雑誌はすべて目を通す」と聞いた。学者としては当たり前のことなのだが、アカデミックな世界とはほど遠いところにいた私は、「学問というものは、厳しく凄いなんだ」と感じ入った。

知り合って3ヶ月ほど経って、同博士から「担当の大学院生のクラスにコメンテーターとして出ないか」との誘いを受けて半年ほど出席した。私が大学に着いた日に出席したマーシャル博士のシリアシンポジウムで、話が20分程度でその後に質問が延々と続いたことでカルチャー・ショックを受けたことは既述したが、ラスメル博士のクラスで講義が全

くないのにも驚いた。クラスには、イギリス、パレスチナ、ヨルダン、カタール、日本、イタリアなどから10数人の学生がいたが、毎週、学生が研究発表をし、学生がそれについての討論し、博士がコメントをするという形式で授業が進められた。日本ではほぼ一方的な講義という形しか知らなかった私には驚きであった。

学生も多様であった。結婚している学生、ベビーカーに乗せた赤ん坊を連れて授業に参加する学生もいた。たしか、大学には託児所もあったと記憶している。

ある時、ラスメル博士が討論用に「石油は呪いか」という命題を出した。私は驚愕した。アカデミックな世界と無縁であった私は、1980年代から学者の世界でそのようなことが言われ始め、1993年にイギリスの経済学者のリチャード・アウティが「資源の呪い」として提起していたことなど、全く知らなかった。

言われてみると、石油の富があるばかりに他の産業の発展が阻害され、石油産業以外の産業が育たないことから起こる若者たちの就職難、アラブの伝統的な価値観の喪失などなどの負の部分があることは理解はできる。さらに、是非は別にして、非民主主義的な体制の存続につながることも理解できる。この議論では、石油の富は女性の経済的・政治的な進出にも影響を与えることや、産油国は好戦リスクが高く内戦や国際紛争につながりやすいという主張もあった。

ただ、私は湾岸各国が1970年代初めからの想像を超える目覚ましい発展を遂げてきた様子をこの目で見てきている。1960年代「クウェートってどこ」、「アブダビってどこ」、「ドバイ？知らない」などと言われていたこの地域が、いまは世界中でしっかりと認知されるようになっている。この地域の人びとは石油の富による発展の恩恵を十分に享受している。それにしか頭になかったその時の私は、授業の中で、当然のように「石油は呪い説」に強く反論した。

合流してまもなくのエクセター大学の告知板で、4月にドバイでアル・マジッド文化センター（ドバイ）・UAE大学・アブダビ文化財団共催の「旅行者、外交使節、伝道者たちの書き物にみるアラビア湾」というシンポジウムがあることを知った私は、単身ドバイに飛んだ。初めての国際シンポジウムへの参加であった。

参加者は、およそ150名。うち約80%がアラビア語圏からの学者で、約20%が欧米やその他からであったが、日本人は私一人。その場でアメリカの著名なオマーン研究者のアイケルマン博士に会えて、食事まで一緒にできて大感激。同席したオマーン人学者から「私の息子のお嫁さんは日本人」と聞いてビックリ。そこでは、その後も付き合うことになったオマーン人歴史学者やエクセター大で博士号を取得したアブダビ人学者とも知り合い、私のアカデミックな世界での知り合いも広がり始めた。

私がいた「アラビア湾岸研究所」の階下には、エクセター大学のアラビア語科があった。その年の9月、そこで白髪まじりの男性をみかけた。話してみると、「70歳の新生」だった。イギリスの大学は、ほとんどが国立大学である。そこには、国民の税金が使われている。その金を使った国立大学に70歳の高齢者を受け入れる。その寛容性も驚きであった。

大学では、中東の政治、ジェンダー問題、宗教、文学などの研究会やシンポジウムがしばしば行われ、私もできるだけ出席をした。印象深かったのは、ヤマニ元サウジアラビア石油相の長女のマイ・ヤマニ博士の「サウジアラビアの女性たち」という講演会。197

4年当時OPECの会議で度々見かけたヤマニ大臣によく似たぱっちりとした目の、オックスフォード大で博士号を取った才媛であった。講演の中では、サウジアラビアの女性が、イスラムの勉強に打ち込み、またビジネスへの投資に熱中していることなどを興味深く拝聴したが、講演後の懇談会で直接彼女に「サウジアラビア女性が外国で勉強するか、外出する場合に男性の付添いがないといけないと聞いているが、あなたは？」という質問をした。「私には、保護者はいなかったわ」といたずらっぽい表情で答えてくれたのが、いまでも脳裏に残っている。

在籍中、オマーンの留学生たちとはよく付き合った。当時エクセター大学には、博士課程と修士課程で10数人のオマーン人学生がいた。とくによく付き合ったのは、半年間寮も一緒であった歴史学の博士課程にいたムカッダムと、一軒家に住んでいた民俗学の博士課程にいたサリム。2人とも私の研究室と同じ建物内にある中東専門の図書館に通っていたのでよく顔を合わせ、話もした。ムカッダムとは寮の火災訓練でサイレンが鳴る度に、一緒に寮の中庭で顔を合わせた。サリムの家はオマーン人学生がたむろする場所になっていて、私も何回か訪れた。参加する度に、オマーン人も日本と同じく室内に入る時に靴やサンダルを脱ぐことは確認できたが、玄関先のサンダルや靴が日本とは違って、乱雑に脱ぎ捨てられていたのには閉口した。

オマーン人留学生の中で、化学の分野で博士号を取得したハイサムも強く印象に残っている。オマーンでは1994年8月にイスラムの名を使って暴力沙汰を起こし、国を混乱に陥れようとしたとされた秘密組織が摘発され、省の次官らを含む約2百人が逮捕されるという事件があった。ハイサムは当時同じくイギリスに留学中の兄とともにこの組織の一員とされ、「私はなにもしていないが、帰国すると逮捕されるかもしれない。貴男はオマーンの政府要人とつながりがある人。私はどうしたらよいだろうか」との相談を私に持ちかけてきた。私は「心配しなくともよいのではないか。国に着いたら、正直に話をすればよいのではないか。罰を受けるようなら受けて、その後に再出発したらよい」というようなことを言ったと記憶している。

その後、この組織が外国の宗教団体とつながっていたことが判明したが、国の転覆を図ろうとした疑いは晴れた。ハイサムも無事国に戻れたと思われるが、その後UAEの大学で教鞭をとるようになったと人づてに聞いて安堵している。

エクセター大時代、忘れられぬ2人の日本人女性がいる。一人は、新川加奈子。私が到着した日の夕方に大学のゲストハウス「リードホール」前で車から降りたところで、「日本の方ですか」と声をかけてきた女性である。彼女は、東京大学で博士号を取得した人であるが、ご主人を日本に残し、6歳になる息子を連れてエクセター大学で国際協力関係の修士課程に学んでいた。大学が所有する一戸建ての家に住んでいたが、フランス在住のお姉さんの高校生の娘さんを預かったりして諸事たいへんだったので生活上の相談にも乗り、彼女が通信制で修士課程を終えられるようにして、早めに日本に帰国するに当たっては、所有する車の売り先を見つけるのに協力した。

彼女から聞いたことで、いまでも記憶に残っていることがある。専攻する国際関係のコースで助手を務めていたシエラレオネ出身の男性、並外れて優秀な頭脳の持ち主であるという話。東大で博士号を取得した彼女が言うのだから間違いなかったであろう。私は、「頭がよいかなどは人種で変わるものではない」ことを強く知らされ、以来「アフリカは人類

発祥の地、身体的にも頭腦的にもアフリカの人が他の民族に比べて優秀かもしれない」と夢想するまでになっている。

もう一人は、倉岡尚代である。彼女は東京外国語大学を卒業後、エクセター大学で中東政治を専攻する修士課程に在学していて、ラスメル博士のクラスにいた。同窓のよしみもあって、よく部屋に来てもらったり、パブに行ったり私的にもよく付き合ってもらった。

こちらは自由な身であったが、イギリスの大学院は2年間ではなく、1年間である。そのため、勉強の密度が極めて濃い。よほど勉強しないとついていけない。私のために無為な時間を過ごさせたのではいかと気がかかっていたが、彼女はその後博士課程に進んで無事に博士号を取得して帰国した。安堵している。

9-4. アラビア女性が世界一幸せ - マヤ・ヤマニ博士の話

私は、毎年英国で行われている英国中東学会のシンポジウムには3回ほど出席した。そこでは、中東の政治、経済、社会、文化など各面に亘る研究発表が行われ、いずれも私には新鮮で興味深かった。また、参加者の夜の懇親会パーティーが楽しみでもあった。

それは、私が初めて参加したダーラム大での英国中東学会の野外での歓迎パーティーでのことであった。ほとんどの人が初対面であった。グラスを片手に出席者の方々と話をしているふと見ると、シンポジウム第一日目の午前中に「アラブの女性」について研究発表をしたヨルダン、クウェート、パレスチナからの女性博士たちの姿が目に入った。

そこで、私は彼女たちに近づいて「貴女たちのプレゼンテーションはとても興味深く、勉強になった。ところで、世界で一番幸せなのはどこの国の奥さんだと思う？」と問いかけた。答えが返ってこない。私は、イスラムの国ではご法度のアルコールの勢いを借りて、持論をぶち上げた。「それは、日本の奥さんたちだ！日本で財布を握っているのは、旦那ではなく奥さん。私も結婚以来毎月、妻から小遣いを貰っている。それに、日本の男たちは働きバチ！毎日朝早くに会社に出かけて、家に帰ってくるのは深夜。そこで奥さんたちにはたっぷり時間がある。男たちが働いている昼は、『今日はここ、明日はあそこ』と友だちを誘っては、レストランを食べ歩いている。お金があって、時間がある。これ以上の幸せはないでしょ！」と。

独身の3博士のうち、まずはヨルダン女性が「それはいい！私、日本人と結婚したい。相手は見付かる？」と言い出し、「それっていいわね」とパレスチナ女性。ついにクウェート女性までもが同調した。そこで、「簡単、簡単。それなら、見合い写真を預かろうか」と私は手を差し出していた。

ところが、すでに述べたように、その後私はエクセター大学でヤマニ元石油大臣のお嬢さんの話を聞く機会があった。彼女の話のあらまは、「アラビアでは家族を食べさせ、着せて、住まいを提供するのは、男の務めです。遺産は男性の半分ではあるが、女性にも分与される。衣食住の提供は男の務めだから、女性のお金は手付かずで残る。サウジアラビアの家庭ではメイドを雇うのが通例で、奥さんたちには時間もたっぷりあります」、「彼女たちが日常やっていることは、昼はカルチャースクールに通ったり、女が車を運転してどこが悪いなどと議論したりしています。また、自分の金をビジネスに注ぎこんでいる人もいます。いま、ジェッダの商店の7割が彼女たちの持ち物です」というものであった。

これを聞いて、私ははたと悟ったのだった。「世界で一番幸せな女性は日本女性ではない。アラビアの女性たちである」と。あの時、3人の博士から見合い写真を預からなくて良かったといまは思っている。

午前中のそのセッションで、活発に質問を繰り返す女性がいた。アラブ人らしい。セミナーが終わってから、「貴女はどこの国の方ですか」と訊くと、「私はサウジアラビアから来ています」との答え。「えっ、サウジアラビアの人？」と驚いた。それまでの中東勤務でサウジアラビア女性にはまったく縁のないものと思っていたが、イギリスでこんなに簡単に会えるどころか、自由に口が聞けるのには驚いた。

「私は、いまバーミンガム大学の博士課程にいるの」と屈託がない。もちろん、顔も隠していない。「専攻は歴史です」と付け加えた。彼女とは、その後エクセターとバーミンガムで手紙をやりとりしたり電話をかけ合ったりする仲になり、バーミンガム大学を訪れる約束までしたのだが、さすがに私が遠慮して実現しなかった。今ごろ、彼女は母国サウジアラビアの大学の教壇に立っている筈である。こんな出会いも、イギリスならではの貴重な経験であった。

9-5. あれ、あの女性かな - オマーン富豪とのロンドンでの休日

エクセター大学が休暇中のある日の昼近くに、ロンドンのオックスフォード・ストリートにあるセルフリッジズ百貨店の正面玄関で、私はオマーン人アブドラと頻繁に行き交う人の流れを伸びあがって見続けていた。「あれ？あの女性？いや、違うな」とアブドラ。それらしき女性を見つけて「あの女性？」と私が訊くと、アブドラが「いや、違う」と言う。「あれかも」、いや「やっぱり違うな？」とアブドラ。「実は、今日の女性がどんな女性か、はっきりとは覚えていないんだ」とはなはだ心許ない。「そんなに大勢女友だちがいるのか」と、私には驚きであった。

アブドラは、オマーン有数の大富豪。年は、1934年生まれで私より一つ下の当時62歳。オールド・マスカット出身、いわゆる「マスカット商人」の二代目であった。

マスカットでは、旅行会社を経営し、多くの欧米や日本の自動車や家電メーカーのエージェントを務め、オマーンの鉄工所や製粉工場などの株主でもあった。また、300軒にも上る家作を持っていた。海外でも、カイロ、バイルート、UAEなどでも手広く不動産開発や売買をやっていたが、それらはすべて息子や番頭などに任せ、その頃本人はロンドンでの不動産投資に没頭していた。

1992年に私がオマーンに赴任したときに、彼の持ち家に店子で住んだことから親しくなった。気が合ったのか、私は事あるごとに事務所を訪ね、妻ともども彼の自宅や郊外にある別荘によく招待された。また、彼もわが家に一人でよくやってくる。女性についても、なかなかの発展家であった。

「ミスター・エンドー、たまにはロンドンに出て来いよ。飯でも食べよう」とエクセターにいた私に声がかかったので、その日私は、朝10時過ぎにロンドンの彼の家を訪ねた。家は、オックスフォード・ストリート近くの高層マンションの一階。豪華な家具をしつらえた広々とした部屋で、彼は一人暮らしをしていた。

お茶を飲みながらひとしきり話をした後で、昼飯は女性を入れて食事をしようというこ

とになった。アブドラは取り出した手帳をめくりながら、それから女性に電話をかけ始めた。「昼ごはんを一緒に食べないか。2, 3人誘ってもいいよ。日本人の友人が来ているんだ」と何人かを誘った後に、一人の女性が応じてくれたようだった。食事は中華料理屋に決まった。待ち合わせ場所は、セルフリッジズ百貨店の正面玄関。それで、先ほどから60歳を過ぎた日本人とオマーン人の老人2人が人の流れの中に「あの人かな?」「この人かな?」と女性を探していたのである。

「彼は部屋から何人かの女性に電話をしていたから大勢の女性と付き合っているに違いない。自分が誘っているのに、友達が大量あり過ぎて今日誘った女性がどの女性なのかよく分かっていないのか」と訝りながら、私はただただ人の流れを見詰めていた。そのうちに、金髪の女性2人が現れた。人ごみの中からおれおれに近づいてくる。アブドラが「ああ、あれだ!」と彼が言うので見ると、それが電話で応じてくれた彼女らしかつた。2人ともイギリス人女性。

そこから4人で近く中華料理店へ行き、「なにがいい? まず、ワインね。料理は?」と聞きながら、彼は北京ダックも入れたフルコースの料理を注文した。美女たちと一緒に食事。楽しいひと時であった。それにしても、「誰か覚えていないくらいの異国の女性の友人を持ち、簡単にその友達まで入れて食事に誘うアブドラはいいな。私は今日のご馳走になっているが、私も招く方に回りたいものだ」と強く思ったロンドンでのアラブの豪商とのひと時であった。

なお、この話には後日談がある。私が1997年にオマーンに再赴任してから、彼がロンドンで目の手術をすることになった。マスカットに住む彼の長女に、「手術をするのに、お母さんもあなたもロンドンに行かないの?大丈夫なの?」と訊いたら、「誰も行かないわ。パパにはロンドンで世話してくれる人がいるから」というつれない返事。

「いくら金持ちでも、オマーンでは奥さんや娘さんたちから見捨てられているんじゃないの」と少し同情した。

9-6. 貴男の好きな色で - ラミー・ベトン博士を偲ぶ

エクセター大学で、とくに忘れられない女性がいる。ラミー・ベトン博士である。

私が最初に滞在した「リードホール」は来客用の施設なので数日しか居られないということで、3泊ほどした後に大学当局から「クリストウ棟」に移るように言われた。そこは、研究所から比較的近い大学構内の一角の木立に囲まれた落ち着いた雰囲気の中にある二階建ての一棟で、主に教授用の宿舎であった。

一階には、中央にある正面玄関を入れて左右それぞれに10ほどの部屋があった。私が入居したのは玄関を入れて右手の奥から二番目の左側の部屋。奥の突き当りには、左側にテレビもある共用の応接間、右側には冷蔵庫や調理用具・食器が備え付けられ、食卓もいくつか置いてある居住者共用のキッチンがあった。

各自の部屋には、入口を入れて右側に洗面所・トイレと簡単なシャワールーム、右奥の壁際にベッドがあり、反対側には壁際にやや広い勉強机が備え付けられ、最小限の居住用設備が施されていた。これで、家賃は週1万円強。「これで十分!いよいよ大学での生活が始まるのか。周りはアカデミックな人たちばかり。どんなことになるのだろうか」と私は緊張の

中で入寮した。

入寮してからしばらくの間、朝食を私は共用のキッチンでパンと牛乳で済ませ、昼と夜は大学内のレストランで食事をとった。学内には、リードホールにある教授用のレストランと学生用の食堂が6ヶ所ほどあり、また大学近くにはパブが何軒もあったので、食事の場所に不自由はなかった。

3週間ほど経ったころのことであった。キッチンで「ミスター・エンドー、食事はどうしているの？夕食を毎日大学で食べているの？自分で作ったら」とラミーが話しかけてきた。彼女は、エクセター大学法学部の教授。オランダ人で当時47歳の独身女性。部屋は私とは反対の列の入口に近い、斜向かいの部屋に住んでいた。見かけてはいたが、これが私がラミーと話すようになった最初だった。

もともと女性に弱い私は、彼女の勧めに従って買い物にも行き、共用の冷蔵庫にため込んだ食材を使って、不器用ながら料理を始めるようになった。彼女にはよく叱られもした。「エンドー、肉を焼いた食器や鍋などは、水洗いでは駄目よ。油なんだから、お湯でなければ駄目よ。お湯の中に洗剤を入れて洗うの」などと。

また、同居の人たちとも接する機会が増え、何人かの顔なじみもできた。オックスフォード大で博士号を取って理学部物理学科に赴任したばかりのイギリス人のヒッケン講師、文学部フランス語科のフランス人のセザンヌ准教授、ニュージーランド人の大学院生のジョーンズ女史とそこご主人などなど。

ジョーンズ女史のご主人は画家。画家は、どの国でも仕事上の支障がない。彼女が大学に通っている間、ご主人はキャンバスを抱えては絵を描きに外出していた。描くべき風景は大学の内外にたくさんある。「こういう形の夫婦もあるのか」と、日本のサラリーマン生活だけを送ってきた当時の私には驚きであった。

私のつたない料理ぶりが気になるのか、時にはラミーが私の分も作ってくれて、2人でキッチンでワインを飲み夕食をとりながら、いろいろな話をするようにもなった。彼女はオランダ最古の名門大学であるライデン大学の出身。若い頃は不良少女だったが、一念発起して学者になったという変わり種。離婚歴もあるとのことだった。こういう生き方の女性に会ったのも、私には初めてであった。

ある時、ラミーに客があった。彼女の恩師夫妻がオランダからエクセターにやって来て、2、3日大学に泊まったのである。ご主人は、ライデン大学の教授を長いこと務め、当時はオランダの女王陛下の法律顧問をしているとのことであった。名前はピーター。

ラミーは接待に大童。夜の食事は、寮の共同キッチンで腕を振るった。独身の彼女は、夫妻とつりあいをとるためか、私をホスト側としてワイン付の食事に2晩続けて招いてくれた。

2晩とも、食事が終わると、ピーターは、自ら席を立って食器を洗った。奥さんは悠々と食卓に座っている。「ピーター、貴方は家でも洗い物をするの」と私が訊くと、「これしか出来ないからね。これは、いつも私の仕事」と、70歳過ぎた社会的地位の高い法律家は事もなげに言った。私には、驚きだった。それ以来、私は「日本の最高裁判所の裁判官の何人が自分で茶碗を洗っているのだろうか。国民審査の投票の時に、皿洗いをしているかどうかの情報も提供してもらえると、判断がし易くなるのに」と思うようになった。

そのうちに、ヒッケンやセザンヌも一緒にテーブルを囲んで食事をするようにもなり、夜

の応接間でワイングラスを傾けながら、イギリスのサッカー試合のテレビ観戦をすることもしばしばだった。ある晩、ラミーが「エンドー、麻雀知っている？」と訊いてきた。「知っているどころか、俺は麻雀の日本チャンピオンだ！」と言うと、「習いたい」と言う。「それは無理だよ。牌が無いもの」と言う、ヒッケンが「麻雀牌なら私が持っている。父親から貰っている」と口を挟んできた。

「そう、それじゃ麻雀を教えてやる。その代わりに英語を教えてね」と、私はエクセター大学麻雀クラブを立ち上げた。まさかイギリスの大学で麻雀を教えることになるうとは、思いもしなかった。メンバーには、フランス語教師のセザンヌも巻き込んだ。

4人で週末で麻雀をやることになった。場所は、大学の寮を出て学外に借りたヒッケンのアパート。週末の夕方そこに集まり、メンバーが交代で各国料理を振る舞ってから麻雀を楽しんだ。私は、「イギリスの大学で麻雀を教えながら、英会話を習う」という思ってもみなかった経験をするようになった。

ある時、夕食は私が日本の炊き込みご飯をメンバーにご馳走することになり、エクセター大学大学院に通っていた東外大の後輩の倉岡にも手伝いのために、麻雀会に加わってもらったことがあった。麻雀が終わってから夜遅くに、ヒッケンの車で倉岡を彼女の下宿に、他のメンバーを寮に送ってもらうこととなった。彼女の下宿の近くに来て私が、「ライト (right)、プリーズ」と言うと、彼は「ライト (light) ?」と怪訝そうに言って、車を道路脇に寄せて室内灯を付けようとした。私は慌てて、「ノット・ライト (not light)。プリーズ・ターン・トゥ・ザ・ライト (please turn to the right)。プリーズ ライト (right)」と言った。

私は東京外国語大学英米科卒業。第一志望の大学でなかったのも、まじめに勉強しなかった。英語の成績は低空飛行で卒業したが、音声学は日本一の岩崎民平教授に習ったので、英語の発音だけはそここの水準を保っていた。中東勤務で英語の発音が雑になっていたせいもあったのだろうか、イギリス人が「L」と「R」の発音を明確に聞き分けることを思い知った瞬間であった。

7月のある日、私はエクセター大学に留学していた日本人学生3人を連れて、大学の東側の構内の林を出たところの通りを渡り、左に少し歩いて右折した小路に面して建つ二階建ての家を訪ねた。イギリスの夏の光が、燦々と降り注いでいた日だった。そこは、ラミーが購入した家。家の塗装をするというので、私が倉岡に依頼して、助っ人として日本人留学生を集めてもらったのだった。

家の塗装を自分でするのは欧米人にとっては当たり前のことだが、私にとっては、人生初体験。学生たちが梯子をかけて外壁や屋根などを塗っている間、ラミーが私を二階に連れて行って、角部屋を指さして「ここは貴男の部屋。好きな色に塗って！」と言った。「これが俺の部屋？ どういう意味？ 同居しようという意味？」と思いながらも、「好きな色は水色。水色でいい？」と言いながら、私はその部屋の壁面を水色に塗った。その後、彼女の家はヒッケンの家に加えての麻雀会場となり私は何回か通ったが、この部屋に泊まることはなかった。

その年の10月下旬になって、通産省から、「オマーン商工省が、もう一度オマーンに戻ってきて欲しいと言っています。来年2月から行っていただけますか。任期は一年」という問い合わせが飛び込んできた。大学側からは、「もう一年居てもいいよ。大学で教えて貰っ

てもよい」という話もあったが、私の能力では大学で教えるのは無理なことであり、私は中東の現場で働けるこの話を喜んで引き受け、「行かせていただきます」という返事を出した。

11月に入って、拓殖大学で英語を教えていた大学の同級生の女性から私に、「拓殖短期大学の国際経済担当の教授が夏に病気で亡くなり、後期の講義ができなくなった。その講義を集中講義の形でやりたいと、大学が言っている。貴男この講義を引き受けてください」という連絡があった。私は、大学で教えた経験がない。一旦は断ったのだが、「大丈夫、貴男ならできる」と再度要請をうけ、「女性に言われては断わる訳にもいかない」と引き受けることにした。そこで、オマーンに赴任する前の1997年の1-2月の集中講義で、半年分の講義を穴埋めすることとなった。

そのうちの一回分の授業に欧州連合（EU）を取り上げることとし、ラミーに「EUのことを勉強したい。協力して」と言うと、「分かった。来週火曜日の夜に、自宅に来て。一緒に食事をしましょ。ご馳走するわ。勉強はその後ね」との返事。

かくして、私はノートを持ってその夜彼女の家に向かった。ワイン付きの食事をご馳走になってさあ勉強と思って居間に移り、「EUの成立した歴史はこれでいい？成立までのいきさつは」などと二人っきりの居間で訊ねたが、彼女はこちらの調べたことを追認するのみで、積極的な回答が返ってこなかった。

「せっかく来ても、成果はあまりないな。効率が悪いや」と感じ始めたころ、彼女が床に横になって、身を投げ出した。仕方なく私も腹ばいになった。その時、ラミーの顔と体がすぐ横にあった。「このまま居ると、不味い！」と感じた私は、さりげない話をした後に早々に彼女の家を辞した。冬のイギリス、外はすっかり夜の帳が落ちていた。

ラミーの家の前の小路を右に抜けてやや広い道に出て、少し左に行って右側の大学の構内に入った。いまでも、あの小路の暗がり、大学の構内に入ったところにある広場を囲む明るい街路灯、その奥にある林越し暗がりに浮かぶ大学関連の建物の風景が脳裏に焼き付いている。一人での真夜中の寮への帰り道であった。

それから5年後の2002年10月に、一通の手紙が私に届いた。裏表に青い線の囲みのある白い角封筒。宛て先はあるが、差出人の名前がない。切手の消印を見ると、オランダからであった。「なんだろう？」と思って、封を切ると「ラミー」の名前が目に入った。すべてオランダ語。

皆目読めなかったが、ラミーの死亡通知のようであった。さっそく近所の図書館でオランダ語の辞書を片手に、読んでみると、彼女は9月15日に亡くなったらしかった。

念のために、ヒッケンに確認すると、「ラミーは背中痛みで休講していたのだが、ひどくなり、その後は大学を辞めてオランダに帰った。癌だった。自分も死亡通知を受け取った。エンドーも知っているインドネシアから養女にしたクリスチーナが、葬儀を取り仕切ったようだ」と聞いた。まだ、若かっただけに癌の進行が早かったのだろう。

私は、クリスチーナに心ばかりの花代とラミーの墓前で読み上げて欲しいと彼女への弔辞を郵送した。「本来は私がオランダの彼女の墓前で読むべきであるが」との前置きをつけた。その後2003年にエクセター大学に2週間ほど滞在した時に、ラミーが住んでいた家の前も訪れて彼女との思い出にふけた。

ラミーは酒が好きだった。私が宗教の話で、「日本の神道が世界で一番の宗教。多神教だから、一神教のように争いが起こらない。また、神には誰でもなれる。俺だって、庭に『遠

藤神社』を作れば神様になれる。神道の神様はみんな酒が好き。だから、人びとは神社や神棚に御神酒を上げ、また神にあやかろうと祝い事には酒を飲む。神社では人びとの幸せだけを祈願する。さらに、神社には巫女さんという若い女性がたくさんいる。私には会社の定年後に神主になった友人がいる。彼はひたすら人びとの幸せを願い、若い巫女さんたちに囲まれている、御神酒を飲み、しかも定年がない。私はいつも彼に『君が一番幸せな人生を送っている』と言っている」というと、彼女は「私、神道に改宗したい」と言ったものだった。

エクセター大学からの帰りにオランダへ行って、ラミーの墓前で早すぎる彼女の死を悼みたいと思ったが、その機会を逸してしまった。生命あるうちに、彼女の墓を訪れたいと願っている。彼女とは、もう一度一緒に酒を飲みたかった。合掌。

主な文献：

「石油の呪い」（マイケル・L・ロス著、松尾昌樹・浜中新吾共訳、吉田書店、2017年）